

名古屋の古道・街道

池田 誠一

【14】山口街道…古出来町から香流橋へ

1 幕府の巡見使

江戸時代、幕府は全国各地に巡見使とよび使者を派遣していました。天領の視察をはじめ各藩の治世状況等を視察するもので、制度化されてからは1組が正式の使者3人と供や人足で総勢100人位になったようです。全国を8つほどの区域に分け、ほぼ定まったルートを進みました。

初めは3代家光の頃で、4代から12代まではおおむね將軍の代替わりのときに派遣されてい

ます。何十年に一回ですから一見少ないようですが、將軍の使者ということで通行路をはじめ、宿泊場所から想定問答まで万端が準備された、まさに一大行事でした。そのために整備された道は巡見道と呼ばれ、全国にその跡が残っています。名古屋では市の東北部にその巡見道といわれた道があります。山口町から東の猪子石に向かう「山口街道」と呼ばれる道もそのひとつです。

2 巡見使の通った道…山口街道

(1) 名古屋付近の巡見街道

巡見使が尾張に来たのは1667年から1838年までに8回の記録があり、村々を実に細かく回っています。

1760年の例では、江戸を出た巡見使の一行は駿河、遠江を経て三河をぐるりと回って刈谷で泊まり、そこから尾張に入りました。そして知多の緒川、横須賀を回って鳴海から東海道に出て熱田宿で泊まり、名古屋城下を通過して城の東の山口で城下を離れています。

(図1)

尾張誌の付属図では、その後はまず春日井郡の鍋屋上野村を通り、すぐ愛

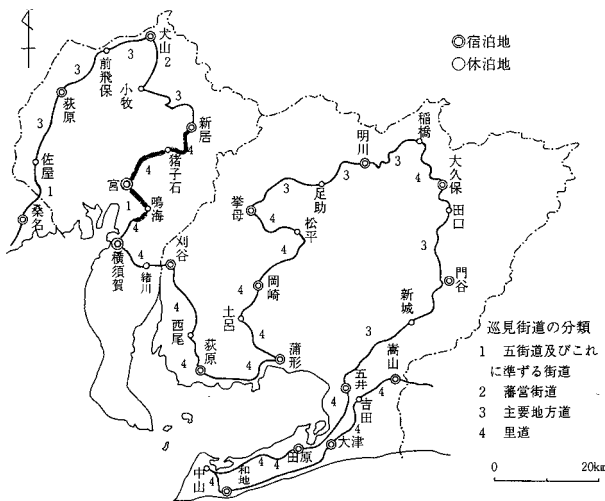


図1 巡見使の経路(文献②より)一部修正

智郡の猪子石村に入ります。(図2)そして途中で少し南に振り、藤森村、上社村の辺りを通って長久手村へ。その先の岩作村で向きを北に変え、矢田川を渡って水野街道の新居に行きました。後は志段味を横断して小牧、犬山へと向かいました。尾張西部の一宮から稲沢、津島を結ぶ道は今は巡見街道と呼ばれる幹線道路になっています。

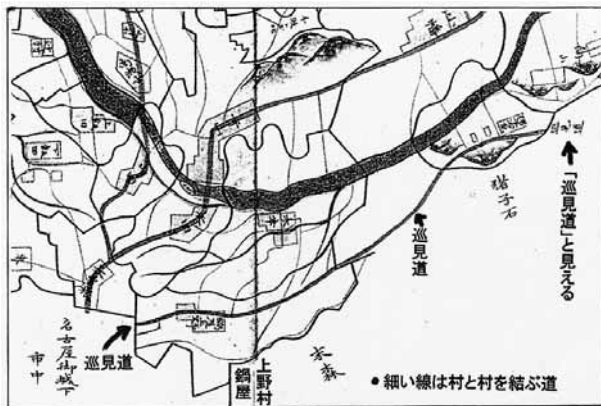


図2 尾張誌の付属図にみる巡見道(春日井郡の南部)

(2) 山口街道

出来町筋を東に向かう街道は巡見道にも使われましたが、山口街道という名が残るように、もともと城下と瀬戸、長久手方面とを結ぶ道だったと考えられます。山口の名は、飯田街道が駿河町の名で呼ばれたように、城下の出入口になった山口という地名が使われたのではないのでしょうか。(明治時代に山口往還といわれた道は瀬戸の南の山口村への道でしたが。)

ルートは清水口を東に、古出来町から鍋屋上野を通り茶屋ヶ坂を下って香流川を渡ります。(図3)そこから巡見道は長久手に向かいますが、瀬戸方面に向かう道はその先で左に折れ、稲葉を通り三郷から瀬戸へ。また稲葉から本地を経て瀬戸の南の山口にも通じていました。

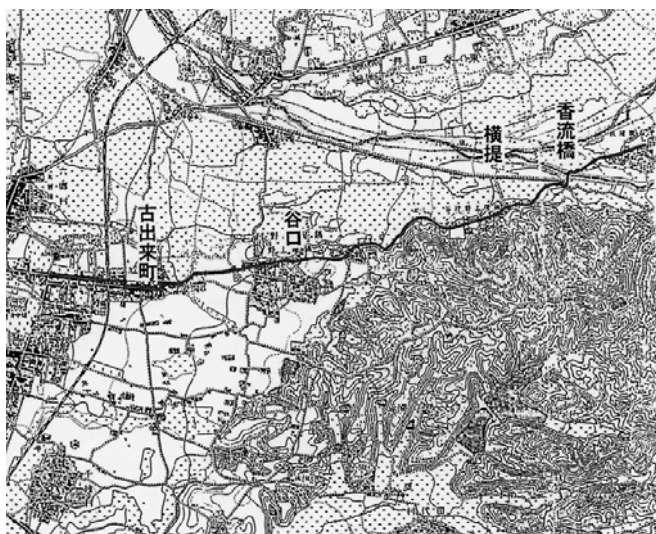


図3 市内の山口街道(明治24年)

3 古出来町から香流橋へ



振甫中学北東の山口街道
右側に小川のあとがある

それでは山口街道の一部を歩いて見ましょう。新道(新出来町線、以下同じ)を離れて旧道の残るのは古出来町です。古出来町はその前は出来町でした。2代藩主光友が大曾根から建中寺にいたる大庭園を計画したときに山口の道はなくなりました。が、光友が死んでその計画が流れ、復活した道の沿道が新・出来町になり、元の町は古・出来町になったといえます。

街道はその古出来町に入ったところで1本南にずれました。今の交差点の一つ南の道です。東に進み、振甫中学の所で少し北のカーブした道に移ります。振甫中学の奥には昔萱場池があり、カーブした道の東の突き当たりには小川も流れていました。旧道は突き当たって住宅地の中に消え、新道に合流します。

このあと谷口までは旧道はなく、新道を進むこととなります。ただ沿



▲安倍晴明の清明神社

上野天満宮▶



線にはいくつかの史跡があります。特に注目したいのは清明山の信号から北に200mほどの台地の端にある清明神社です。最近陰陽師として注目を集めている安倍晴明は987年ここ上野の地に住んだという言い伝えがあります。神社は18世紀に創建されたもので、小さなお社ですが清明ブームで全国から参拝の人が訪れるようになっています。

さて谷口の少し手前の交差点から南に入ると昔の上野村です。上野村は中世以前は北の低い所にありましたが、度重なる浸水のために現在の台地に移りました。上野といましたが郡内に同じ上野村があるため、藩の鋳物師になった水野氏が住んでいたことから鍋屋上野村と呼ばれました。

少し先の右に永弘院が見えます。戦国時代下方氏の築いた上野城が少し先の上野小学校の辺りにあり、この寺はその菩提寺として1538年に創建され、後に当地に移されました。境内には勝軍地蔵(再興)のお堂や、上野城址の碑、さら

には北側の街道沿いにあったという馬頭観音等があります。

永弘院の南の道を東に進むと長養寺があります。古い寺とされ1602年に大幸からここに移ってきました。天満通を渡って少し東に行くと上野天満宮があります。縁起によると先程の安倍晴明の一族が上野に住んだとき菅原道真を慕ってその神霊を祭ったのが起源とされ、京都と同じく学問の神様として信仰を集めています。

さて、谷口の交差点から1本南の道を東に進むと、Y字路の間に弘法堂があります。1本東に尾張四観音を廻る巡礼道があり、その道標となった石仏等がまつられています。街道はその四観音道を合わせて北に坂を下り、新道の1本北の道を通って今の茶屋が坂の交差点に出たようです。四観音道はそこで北に、山口街道は東に新道を行きます。少し行くと右手にまた弘法堂があります。位置は少し東に移りましたが、昔は崖の下に清水が出ていてちよろちよろ弘法と呼ばれていたそうです。

永弘院



永弘院境内の上野城址
(碑と左下に馬頭観音)

茶屋ヶ坂を下って



街道はその東の交差点で右側の山裾の道に入ります。道は緩やかにカーブし、しばらく行くと少し坂を上って止まります。この坂は右の山手から左の矢田川まで続く堤防になっており、**横堤**といいました。昔、香流川が矢田川に流入する所は曲がっていたためよく越流しました。そのため、幕末になってここに堤防を築いて水を矢田川に導いたのです。今では河川は改修され、周囲には住宅も立ちましたが、堤防は残っており新道も不自然なその坂を上っています。

さて街道は宅地の中を抜け、さらに山裾を新道の南、北、南と振りながら香流橋に出ます。**香流橋**は江戸中期に架けられたようですが、長い間土橋だったといえます。その橋の右手に古くからあった**馬頭観音**がその身替観音と並んで



ちよろちよろ弘法



今も残る「横堤」



▶香流橋の馬頭観音

まつられています。3度も洪水や爆弾で消え、再び発見されました。そんな話がうそのような、あどけなく見える観音が、時代の流れを越えて今でも街道を見つめているようです。

4 村々を結ぶ道

巡見道は、街道と村々を結ぶ道をつなぎ合せて作られました。江戸時代の絵図にはどの村も隣村を結ぶ道が何本も描かれています。

村々を結ぶ道には、藩や代官所との往復、年貢米や地方の産物の運搬を始め、村人の生活や村と村との交流を支える道でした。道は歩き続けられることによって道として残ります。いくつもの道の存在はそれだけ村々の活動が活発だったということを示しているようです。

山口街道は、古出来町から信州へ塩が運ばれた道でもありましたが、年貢米の道とも呼ばれたといえます。大きな川も無く峠も無い道だけに、猪子石、長久手、稲葉など名古屋の東北部の村々の年貢の米を運ぶのが目立ったからかもしれせん。

暮遅し 観音像に 立ち尽す

〈主な参考文献〉

- ①日本歴史地名体系23「愛知県の地名」(1981、平凡社)
- ②桜井芳昭「尾張の街道と村」(1997、著者)
- ③小林元「香流川物語」(1977)
- ④小林元「千種村物語」(1984)